

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720067

研究課題名 (和文) 戦後台湾における桃太郎の調査

研究課題名 (英文) Study on Momotaro in Taiwan following the end of the war

研究代表者

武久 康高 (TAKEHISA YASUTAKA)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：70461308

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、戦後台湾のサブカルチャーの分野において、「桃太郎」がどのように表現され、いかなる意味を担っていたのか調査したものである。結果、1960 年前後には「桃太郎」が反共政策へと利用され、また、新たな物語を創造するための素材となっていたこと、1970 年になると、「日本」との関連を示すために使われていることが分かった。一方、戦後日本で新たに作られた「桃太郎」は、旧植民地の存在を忘却した上で成立していたことを指摘した。

研究成果の概要 (英文)：

This study looks at the representation and the significance of “Momotaro” in subcultures in Taiwan following the end of World War 2. Results of the study indicated that around 1960, “Momotaro” was used to represent anticommunist policy and was also used as material in the creation of new stories. The study also showed that in the 1970s, “Momotaro” was used to represent the connection between Japan and Taiwan. On the other hand, the study also revealed that in Japan, “Momotaro” was created after the existence of Taiwan as a colony of Japan was forgotten following the end of the war.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本文学一般、台湾、享受史、桃太郎

1. 研究開始当初の背景

旧植民地をめぐる考察は多岐に及ぶが、なかでも旧宗主国による影響について論じる

研究は、植民地支配が旧植民地社会の現在をも規定する要因となっていることを明らかにし、この問題が決して過去のものではない

ことを教えてくれるものである。

しかし一方で、以上のような「旧宗主国の行為が旧植民地の社会を現在でも規定している」と、その二項対立だけで思考する」態度は、「学術的に旧植民地を再度植民地支配すること」にもつながる問題を孕んでいる（上水流久彦「自画像形成の道具としての『日本語』—台湾社会の『日本』を如何に考えるか」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」植民地経験の連続・変容・利用』風響社、2006）。そのため、旧植民地における日本文学の享受の実態を考察する際には、そうした文化的な影響が残らざるを得なかった植民地支配の暴力性に批判的なまなざしを向けながらも、旧植民地で〈日本文学〉がどのようなものとして存在しているのかについて、社会をとりまく複合的な要素や他のありえたかもしれない可能性も含めて考察していく必要がある。

こうした背景を踏まえ、筆者は戦後台湾における「桃太郎」を調査の対象として設定した。それは以下の理由による。

(1) 戦前の「桃太郎」は帝国日本の歩みと重ね合わされ、様々な媒体で利用されてきた。そうした「桃太郎」のイメージは、学校教育や種々の講演会、台湾博覧会といったイベントの場などを通じて日本統治期の台湾社会に流通していたこと。

(2) 戦後の台湾社会において、日本人はしばしば「桃太郎」と呼ばれている。つまり、現在まで「日本人＝桃太郎」という連想関係が台湾に存在し続けてきたこと。

(3) このような状況にあった戦後台湾社会において、「桃太郎」を題材とした漫画や映画などが複数制作されていること。

(4) また、そこでの「桃太郎」は、当時の社会状況のなかで、さまざまな意味性が持たされていたこと。例えば「桃太郎大戦鬼魔島」

（のちに「桃老大伏匪記」と改題、1961）という子ども向けの映画では、封切り直後に「軍歌を使用している」といったデマが流れた。だが、国民党はそうした「軍国主義」的な「桃太郎」のイメージを利用して、中国共産党との戦いに用いるプロパガンダとしても使用した（武久康高『『戦後』台湾の桃太郎』『日本文学』2006）。

このように戦後台湾における「桃太郎」の意図性は、旧植民地時代の記憶や戦後の政治体制、中国大陸の存在などといった複合的な要素のもと、その度ごとに決定されていった。つまり、戦後台湾における「桃太郎」とは、台湾と日本に介在する様々な要素が絡み合う磁場のもと紡ぎ出されてきたこと。

(5) 一方、児童文学としての桃太郎研究では、すでに滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、1981）や鳥越信『桃太郎の運命』（ミネルヴァ書房、2004）などの業績が積み重ねられている。だがこれらの研究では、日本統治時代を経た戦後台湾における「桃太郎」については見過ごされた存在となっていること。

(6) 加えて、(4)のような動きが旧植民地台湾でおこっていた時、旧宗主国日本では、「桃太郎」話が戦前に担った暴力性への忘却が、絵本や学校劇での「桃太郎」の再創造といった行為を通じて進められていた。こうした戦後日本の取り組みや従来の桃太郎研究について、旧植民地との関わりのなかで再検討する必要があること。

2. 研究の目的

約 50 年におよぶ日本統治時代が終焉を迎え、その後も約 40 年間の国民党政権による戒厳令が敷かれていた戦後の台湾において、日本という存在や日本的な文化はいかなる意味を担っていたのか。本研究では、そうした問題の一端について、戦後台湾における「桃太郎」のありようを調査することで明らかにする。加えて、そうした旧植民地における「桃太郎」の実態を調査することにより、桃太郎研究史の欠を補うとともに、同時期の戦後日本の「桃太郎」の歩みを批判的に捉えなおす。

3. 研究の方法

1961年・1970年に制作された桃太郎映画、および1959年の桃太郎漫画は現存が確認できないため、当時の新聞広告や雑誌、公文書などを調査することで、その概要や「桃太郎」の担った意味性を探る。それと同時に、当時の「日本」に関する言説についても、映画に関する新聞記事から収集する。台湾での調査期間は、平成20年度は夏休みに2週間・春休みに1週間、21年度は夏休みに2週間とする。

さらに、こうした台湾での状況と対照させる日本側の桃太郎資料については、終戦直後はプランゲ文庫から、その後は劇の脚本や絵本などから幅広く収集する。また、「桃太郎」や民話に関する戦後の言説も収集する。

4. 研究成果

(1) 戦後台湾の「桃太郎」

①映画・漫画の「桃太郎」

戒厳令期の台湾で制作された「桃太郎」資料については今まで調査がなされてこなかった。今回調査で判明した「桃太郎」に関する映画・漫画は以下の通りである。

映画
1 「桃太郎大戦鬼魔島」(「桃老大伏匪記」) [監督：邵羅輝、主演：邵羅輝、制作：永新影業社、1961]
2 「神童桃太郎」(「金童収妖」) [監督：湯慕華(湯浅浪男)、主演：金子吉延、制作：國民教育電影公司、1970]
3 「桃太郎斬七妖」 [監督：湯慕華(湯浅浪男)、主演：金子吉延、制作：錦華有限公司、1970]
4 「新桃太郎」 [監督：陳俊良、主演：林小樓、制作：金格影藝有限公司、1987]
5 「桃太郎大顯神威」 [監督：趙中興、主演：林小樓、制作：新航線影視有限公司、1988]
6 「鳳凰王子」(邦題「新桃太郎3聖魔大戦」) [監督：李炸楠・莊胤建、主演：林小樓、制作：

學甫有限公司、1989]

漫画

1 「新編桃太郎」

[作者：葉宏甲、1959＝葉宏甲漫画集『桃太郎専集』宏甲出版社1978]

今回は主に、日台断交までの映画(1～3)、および漫画(1)について分析した。

②「桃太郎大戦鬼魔島」(「桃老大伏匪記」)

台湾北部での上映では何らかの問題が起こると予想された「桃太郎大戦鬼魔島」(1961)は、台湾の中南部から上映が開始された。そして案の定、台北市での上映中にその可否をめぐる再審査が行われることとなった。その結果を示す公文書からは、

(1)当時、「桃太郎」を軍国主義と重ねる認識が台湾にあったこととともに、(2)再審査の結果、(a)題名に「桃太郎」という名称や新聞広告に「民間故事」という文言は使わないこと、(b)凱旋帰国の場面を削除すること、という決定が下されたことが分かった。

そこで映画のタイトルは「桃老大伏匪記」と改められる。当時の状況を鑑みると、これは、征伐する側である「桃太郎」を「日本(桃太郎)から中華民国(桃老大)へ」、征伐される側である「鬼」を「匪」、つまり中国共産党へと変化させていく意味が込められていた。そのことによって、本映画のイメージを「中華民国が共産党を征伐する」、つまり当時の国民党政府が奨励していた「反共」映画のそれへと転換させ、人々の持つ「軍国主義的な桃太郎」の記憶を中国共産党との戦いに用いるプロパガンダとして利用していったのである。また、「桃太郎」を「民間故事」と宣伝しないという命令も、台湾民衆の「中国人」化を進めていた国民党政府の動きと連動していた。

だが一方で、各地の映画広告を調査すると、

台北市周辺では「桃老大伏匪記」とされているが、中南部地域ではあいかわらず「桃太郎」や「桃太郎（日片）」とされていた。つまり、台北市周辺と中南部地域とでは、「桃太郎」や「日本」に対する認識や取り締まりの強さに違いがあり、台湾における「桃太郎」や「日本」の存在を考察する場合、こうした地域差の考慮が必要であることが窺えた。

なお、台湾語で「桃太郎」の映画が制作された背景には、「民間故事」を題材とした台湾語映画が大量につくられ、さらに「日歌台唱」の歌曲といった、日本のものを台湾語によって再創造していくことが流行していた時代の状況も影響していることを指摘した。

③「新編桃太郎」

この映画の制作とほぼ同時期、「桃太郎」を題材とする漫画（「新編桃太郎」）が作られた。本漫画の基本ストーリーは桃小童と犬・猿・雉とが何らかの事件を解決するものだが、話が進んでいくにつれて犬・猿・雉の影は薄くなる。さらに、作品上でも「桃小童」ではなく「小英雄」と主人公が呼ばれるようになるなど、「桃太郎」としてよりも「小英雄」の話としての側面が強くなっていく。いわば、「桃太郎」的な物語から「小英雄」の物語へといった、主題の変化が見られるのである。

また、ここで生まれた「小英雄」というキャラクターはその後、「小英雄漫遊記」といった新たな作品を誕生させることとなる。つまり、「桃太郎」が利用されつつ新たなキャラクター（「小英雄」）が立ちあげられるといった、新たな物語の再創造に寄与する枠組みとして「桃太郎」は利用されているのである。

④「神童桃太郎」、「桃太郎斬七妖」

「桃太郎」というタイトルが禁止されたり、桃太郎話の枠組みが新たな意味づけをされ

（反共政策のプロパガンダ）、再創造のために利用されるといった動きに対し、1970年に制作された「桃太郎」にはそうした側面がみられない。その背景には、本映画と「日本」との関わりの深さが指摘できる。

1960年代には日台合作映画も少なからず制作され、台湾映画界が日本人を中国語映画の監督として招く動きも現れた。本映画（「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」）も、後に帰化が認められる湯浅浪男（湯慕華）がメガホンをとっている。また本映画の主演は、青影役として台湾でも著名だった金子吉延である。

さらに、この時期の台湾は、日本映画「大魔神」などの特撮「神怪」映画が流行しており、本映画もそうした「日本の特撮映画」というものを売りにしていた（特撮場面の責任者に円谷プロの塚本貞重を招聘）。

こうした状況で制作された本映画は、当初「金童収妖」としていたものを制作中に「神童桃太郎」と変更するなど、あえて「桃太郎」を前面に出す方法にでる。タイトルに「桃太郎」を入れることによって、「日本」というものを観客にアピールしていくのである。むしろここには、日本映画に対する当時の台湾での人気の高さも影響している。

(2) 戦後日本の「桃太郎」とその意味づけ
今回は、終戦直後から1960年前後までの状況を調査した。

①戦後日本における「桃太郎」は、軍国主義的な桃太郎に対する反省から始まった。

例えば、戸塚文子「桃太郎の話」（『協力報』109号、1948.7）や水谷要「ユーモア お伽国人大いに喋る」（『新講談』1949.4）では、「桃太郎」は軍国主義の象徴とされ、「お伽バナシ其の後」（『女性ライフ』1947.1）や「ムカシムカシソノムカシ おとぎ話 その後の便り」（『延岡ロマンス』1947.3）では、外国侵略や物資隠匿の戦犯として語られている。ま

た、山地延枝「(寓意随想) 桃太郎」(『生活と文化』1-10、生活と文化社、1946. 11) では、軍国調の思想を植え付けてきた桃太郎教育の払拭が叫ばれている。まさに当時は、「敗戦以来、民主、民主の世の中で、桃太郎など読まれますでしょうか」(松崎守男「桃太郎」『ふるさと』1948. 12) という状況だった。

②そんななか現われたのが民主主義的な「桃太郎」話である。例えば、栗原一登「人形げき：桃太郎くんばんざい」(『こども朝日』10-11、1948. 12) では、「みなさん。おにくんはきょうから生まれかわります。(中略) いままでのことはわすれてなかよしになってください」と、鬼もみんなの友だちとなるところで幕がおろされている。

③一方、軍国主義的な「桃太郎」の反省のもと作られた作品としては、奈街三郎「ただの桃太郎」(『日本学校劇選(小学校篇)』櫻井書店、1950. 3) がある。本作品では、桃太郎自身によって「日本一」の旗印が破り捨てられ、「ただの桃太郎」として「大いにはたらく」と決意する姿が描き出される。ここには、戦時下は軍国調の思想注入に利用され、終戦後も軍国主義の象徴と揶揄されていた「桃太郎」の、児童文学としての再出発の願いが込められるとともに、児童文学者自身の「内なる戦争責任」を「作品行動」へと移すものもあった。

④50年代に入ると、人々の民話への関心が高まる。そこには、「敗戦」と「外国軍隊による占領」、「講和・安保両条約による、国の植民地化という現実のなかで、民族の伝統と遺産が、国民的な立場から、あたらしく見なおされる」といった、「民族」への関心とその根底にあった(富田博之「民話と学校劇」民

話の会編『民話の発見』1956. 1)。そこで民話は、日本民族の文化として、また大衆の抵抗の記録として、新たに生かし創造していくことが求められたのである。

例えば、人形劇団プークによる「昔話桃太郎」(1952. 11 発表) では、「桃太郎」を「本来この物語の創造者である民衆自身のものに取り返し、その民話的世界における英雄を、今日的積極的意義を持つ形象に鍛え発展させること」が目指される(川尻泰司「民話的形象の発展」『人形劇場』2-3、1955)。ここでの「桃太郎」は、封建社会を生きる農民たちの英雄として、現代の民族の抵抗に生かすべく再創造されているのである。

こうした流れは、「民話の会」(1952. 2 発足)の動きにも共通している。「民話の会」では国民童話の再検討が行われ、その第一弾である「桃太郎」では、部分的に残る各地の「桃太郎」の再構成を基本的立場としながら、今日的な「桃太郎」—民衆の中の「桃太郎」—の創造が目指される。それが学校劇用の脚本として作られた富田博之「学校劇 桃太郎」(1954) である。ここでの桃太郎は、明治以降行われてきた「上からの国民童話としての『桃太郎』」を排した、民衆が本来もっていた「民衆の中の桃太郎」が造形されている。

これらの「桃太郎」は、「民族」への関心が高まる中、軍国主義に利用された戦前の「桃太郎」への反省を踏まえ、民話の「桃太郎」を、地方の民衆の現実意識に支えられ語り継がれた「民衆の英雄」として再発見・再創造していくものであった。そしてこれは、植民地的な状況にある日本民族の解放・統一を成し遂げるため、そこに動員しうるような日本人の伝統を民話のなかに発見していこうとする動きとして指摘できる。

⑤この後 1960 年代になると、民話と日本民族の解放との結びつきは弱まる。そこでは第

2 次民話ブームのもと、嫁とり話を取り入れた松居直・赤羽末吉『桃太郎』(1965)のように、民衆の間での伝承を活かした「本来の」桃太郎話の再話がなされていったのである。

⑥こうした60年代までの流れを概括すれば、軍国主義の払拭を目指した戦後日本の「桃太郎」は、民主主義的な「桃太郎」を経て、「民衆の英雄」として再創造されていった。なかでも50年代の民話への注目は、その後の桃太郎像を決定づけていくものとして重要なものであった。

しかし、こうした各地の民話をもとにした「桃太郎」の再話・再創造は、単一民族としての「日本人」を形成していく言説としても機能していた。例えば、民話の再話について西郷竹彦は以下のように述べている。

より本質的なものをとらえて典型化された『日本の花さかじい』は、それを信濃の民衆が聞いても、自分たちのものと感じ、また他の国の民衆もおなじく、自分たちのものと考えてだろう。そのような『日本の民話』こそは、日本の民族が一つの民族として形成されねばならぬ歴史的な課題の下にあって、ぜひとも必要なのである。

(西郷竹彦「民話とその“再話”について」『文学』1957.10)

アジア侵略の正当化に利用された戦前の「桃太郎」に対して、その軍国主義的な姿勢が反省され、「我々民衆の子」として再創造された戦後の「桃太郎」。しかしそうした語りは一方で、日本人の単一民族神話の形成に寄与するものでもあった。そしてこうした桃太郎の姿はそのまま、その当時の日本人の自画像をも表しているのである。

だが、この戦後日本人の自画像は、戦前は日本とされた旧植民地の存在の忘却の上に成り立つものであった。前述したように同時期の台湾では、日本人が過去のものとした軍国主義的な「桃太郎」の記憶が色濃く残り、その桃太郎が中国共産党に対する戦意高揚のために利用・再創造されていたのである。

以上のような戦後日本のありようを相対化するためにも、台湾をはじめとした旧植民地における「桃太郎」の調査は今後も続けていかねばならないといえよう。

(3) 研究の意義と今後の課題

研究の意義をまとめると次のようになる。

①今まで取り上げられることがなかった旧植民地台湾における「桃太郎」の実態、およびその意味性を、具体的に資料を収集・分析することによって明らかにした点。

②この作業によって桃太郎研究史の欠を補

うとともに、戦後日本における桃太郎の意味づけを、①との関連で考える視点を示した点。

今後の課題は、今回考察が及ばなかった日台断交以降の資料の収集・分析とともに、そうした旧植民地の桃太郎も視野に入れた桃太郎史の叙述、日本人の自画像／他画像のありようについて考察を進めることである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①武久康高「戦後日本の桃太郎(1) —奈街三郎『ただの桃太郎』をめぐって—」、『日本語文化研究』第10号、査読無、2008、pp1-7

②武久康高「映画「神童桃太郎」「桃太郎斬七妖」(1970、台湾)について—戦後台湾における『桃太郎』—」、『日本語文化研究』第11号、査読無、2009、pp1-8

③武久康高「映画『桃太郎大戦鬼魔島』(「桃老伏匪記」) 補論」、『比治山大学現代文化学部紀要』第16号、査読有、2010、pp1-8

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武久 康高 (TAKEHISA YASUTAKA)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：70461308